

偶像を巡る“聖と俗のつながり”

～偶像論の新たな構成に向けて～

ジュマリ アラム
Djumali ALAM

0. はじめに～偶像は何処に？～

「偶像」という概念の学術的な定義や位置づけはさておいておき、この言葉が現代日本において実際に用いられる可能性のある対象は、次の3種の形態に分けて見ることができる。

- ① 「キャラクター」。すなわち小説、漫画、舞台／演劇、アニメ、ゲーム、絵画／イラスト、映画をはじめとする、フィクション・物語・神話・歴史に登場する、生身の身体を持たない2次元的／平面的または抽象的な、あるいは映像による人型¹のイメージ（擬人化したイメージを含む）。「人間像」「人格像」「人物像」とも言える。
- ② 「アイドル」。すなわち芸能、サブカルチャー、スポーツ、政治、軍事、既成宗教をはじめとする、実世界における各ジャンルのファンやフォロワーより注目を浴びている生身の人間または擬人化された生命体。
- ③ 「人形」。すなわち人間や人間性を指し示す、あらゆる3次元的／立体的な人型（擬人化による表現方法を含む）の物体（彫像やロボットを含む作品やモノなど）。

この3種の偶像の形態は、互いに移行することも融合することも可能である。

【キャラクターとアイドルの関係】 キャラクターは、ファンの誰かが実世界においてうまく演じたり人格を纏ったりして多くの人から注目されたり支持を得たりしたらアイドルに移行することができる。アイドルは、ファンやフォロワーたちが人物と切り離してキャラクター化することがよくある。この場合の「アイドル化したキャラクター」にしても「キャラクター化したアイドル」にしても、当のアイドルという生身の実在にはキャラクター性とアイドル性が融合しており、ファンやフォロワーは二つの実体をそれぞれ個別に認知することができる。現代日本の芸能やサブカルチャーの

¹ 本稿で言う「人型（ひとがた）」とは、「人」と「人とみなされるもの」の両方を合わせて指す。「人とみなされるもの」は、立体的な物体、2次元的なイメージ、抽象的なイメージ（言葉や概念）のすべての形態を含む。

世界で、ファンの多い人気の高い芸能人やアイドルには、演技やパフォーマンスの最中でなくとも、必ずと言っていいほどキャラクター性が伴い、そして大抵の場合、キャラクターをアイドルの人物と区別するための愛称（略称／ニックネーム）がファンの間で作られて用いられる。たとえばアイドルグループSMA Pのメンバー・木村拓哉さんの場合、おおよそではあるが「キムタク」と言うとキャラクターの方を指し、「キムラタクヤ」と言うと実物のアイドルの方を指す。

【キャラクターと人形の関係】キャラクターは、ファンの誰かが立体的な作品に具現化したら人形の形態に移行する。人形は、人気や注目度が高ければ高いほど、ファンによってキャラクター化されることが自然な流れになっている。この場合の「人形化（つまり立体化）したキャラクター」にしても「キャラクター化した人形」にしても、当の人形の実在にはキャラクター性と人形性が融合しており、ファンは二つの実体をそれぞれ個別に認知することができる。たとえば人形劇の場合、劇中に登場する人形は、ファン（鑑賞者）から見ると、キャラクターであり人形でもある。ファンが眼前の人形の身体・動作・表情から何らかの比較的はっきりした（または特定の）人間像・人格像・人物像を思い浮かべ、そうしたイメージと時空を越えた関係を顕著に経験しているときは、キャラクターに当たる。一方、ファンが眼前の人形を一定の人間像・人格像・人物像と結びつけることなく、ひたすら人形の身体・動作・表情に魅了されながら漠然とその場で構成される何かしらの真理や情操を経験しているときは、人形に当たる。

【アイドルと人形の関係】アイドルは、人気や注目度が高ければ高いほど、ファン・事務所・商業者などによって人形が作成されることが自然な流れになっている。人形も、人気や注目度が高ければ高いほど、キャラクター同様、ファンの誰かが実世界においてうまく演じたり人格を纏ったりして多くの人から注目されたり支持を得たりしたらアイドルに移行することができる。

上記のような見方と図式に従うのであれば、冒頭で掲げた「偶像は何処に？」という問いの答えは単純であろう。すなわち「偶像はいたるところにある」または「偶像は人間が生活しているところにある」。そしてわれわれは、偶像を巡るより本質的な問いに向き合うべきではないか：「人間はなぜ偶像と関係するのか？」「人間はなぜ偶像を必要とするのか？」「人間は偶像無しでは生きていられないのか？」。この問いに対する何らかの答えや手がかりを見出すのが本稿の目的だが、事例を含めた詳細な考察に入るにあたり、「偶像」概念やこの概念にまつわる背景・諸問題について、「カリスマ」概念との比較考察を行い、そして東方教会の「イコン」と現代日本サブカル

チャーの「キャラ」の例から、宗教学的なとらえ方を模索しながら整理してみる。

1. カリスマと偶像

「カリスマ」という概念は、宗教学とその関連の学問領域（宗教社会学、宗教心理学、宗教哲学、宗教人類学／文化人類学）において古くから定着している。いうまでもなく、いまや一般的に用いられるようになったこの語が学術用語に導入されたのは、マックス・ウェーバーの仕事に由来する²。

一方、「偶像 (idol³, cult image, image)」という概念は、一般用語としては定着しているものの、実は学術用語として、宗教学とその関連分野の中で用いられることはあまり一般的ではない。代表的な宗教学事典・辞典を見ても⁴、「偶像崇拜 (idolatry)」の記載はあっても、「偶像」という単体の見出しは存在しない。これには、やや複雑かつ微妙な背景がある。

まず、「偶像」という語は、中立性の問題を孕んでいる概念であること。この概念は、一方の啓示宗教⁵と他方の自然宗教⁶との優劣関係によって意味づけされている傾向にある、と言わざるを得ない。なぜなら、本稿で考察するように、一方の「偶像」は、いかなる宗教的な枠組みにおいても何らかのかたちで必ず存在し、他方の「偶像崇拜」は、人間の行為（宗教的行為）としていかなる場合においても精神的なりアリティとして存立することはないにもかかわらず、啓示宗教の立場からの宗教的な見解

² 詳しくはウェーバー [1960, 1962, 1970, 1972, 1976] を参照。

³ この場合の "idol" は、本稿が主題としている「偶像」に当たるが、本稿で用いている「アイドル」の概念とは若干意味が異なる。本稿で用いている「アイドル」の概念は、冒頭で挙げた偶像の3種の形態の一つに意味を限定している。

⁴ 日本で出版されている次の二つの宗教学事典・辞典には「偶像崇拜」の見出しは載っているが「偶像」「イメージ」「イコン」はない。小口偉一・堀一郎監修『宗教学辞典』東京大学出版会、1973。星野英紀・ほか『宗教学事典』丸善、2010。一方、宗教学の最も権威ある次の事典には、"Idolatry" (偶像崇拜)、"Icon" (イコン)、"Image" の見出しは載っているが "Idol" (偶像／アイドル) はない。Mircea Eliade (ed.), *The Encyclopedia of Religion*, Macmillan, 1987。

⁵ 「創唱宗教」のこと。創唱宗教とは「聖なるもの」と「聖なるものとの関係（聖と俗のつながり）」に関する諸々の事柄が明示化／言語化している宗教のことを言う。すなわち「いつ成立したのか」「誰が創始したのか」「聖なるものとは何なのか」「聖なるものとのように関係するのか」などに関する事が当の宗教の教義の中に言語化されている。

⁶ 「自然宗教」とは「創唱宗教」とは対照的な性質をもった宗教のことを言う。すなわち「聖なるもの」と「聖なるものとの関係」に関する諸々の事柄が必ずしも教義として明示化／言語化しておらず、当の宗教が伝統的に受け継がれている地域や集団／共同体の中に慣習として根付いている。基本的には、一定の地域に根付いた民間信仰／民俗宗教にとどまらず、創唱宗教／啓示宗教に属さない宗教的な枠組みは、生活の中の宗教や“宗教”と呼ばれないスピリチュアルな枠組みも含め、自然宗教として見ることが出来る。なお「一神教と多神教」の宗教類型は、「創唱宗教・自然宗教」の類型にそっくり対応していないが、無関係でもない。一神教がたいがい創唱宗教の性質を有しているのに対し、多神教は自然宗教のかたちをとることがしばしばある。

と位置づけによると、偶像という存在と偶像崇拜という行為は啓示宗教以外の宗教に不可避免的に付随する性質であり、啓示宗教とは無縁である、とするからである。啓示宗教の立場からすると、その理由は単純に、啓示宗教における公式な教義で、偶像崇拜ははっきりと禁じられているとするからである⁷。

このような偏った捉え方を払拭した上でこの概念を本来の意味に戻すには、冒頭で挙げたこの概念と結びつく3種の形態（①キャラクター、②アイドル、③人形）を巡るスピリチュアルな次元、すなわち行為者（アクター）ないし主体側から見た対象の実体・正体（あるいは主体が対象から感じ取ること）を、個々の宗教と宗教間における価値判断や真偽の問題を抜きに、一般化してみる必要がある。すると次のような、素朴ではあるがとてもはっきりしたことが言えるのではないか。「主体がこの3種の形態に寄せる精神的な執着心は、対象が示唆したり導いたりする『力と存在感のある人間性』である」。なおこうした力・人間性に対する主体のこだわりは、磁場に引力と斥力があるのと同じように、陽性反応的な場合（憧憬する、魅了される、引き付けられる、など）もあれば、陰性反応的な場合（忌避する、恐怖を感じる、敬遠したくなる、など）もあり、またその間の中間的な関係や相互に入れ替わって関係する場合もある。

いずれにせよ主体が3種の形態から「力と存在感のある人間性」を参照することは、「森羅万象における自らのポジションをうまく認識する」とことと「自らの生の拠り所と立ち位置に関する安定感をもたらす」ということにつながる。人は偶像から“生きる／生きている／どう生きるべきか”というヒント／気づき／刺激／教示／例示を受け取っており、またその意味において偶像は人間にとって、自らの存在の指標／道しるべ／鏡／モデルとして機能していると言えるのではないか。

このような道筋で「偶像」概念の捉え方を正していこうとすると、次にクリアしなければならない問題は「カリスマ」概念との棲み分けである。偶像はカリスマと同じなのか？どこがどういうふうに違うのか？

というのもカリスマは、マックス・ウェーバー以来、「力と存在感のある人間性」という上記で用いた表現と、実質的に近い人間関係の事象として捉えられるようになったからである。まず、以下にウェーバーによるカリスマの定義を二つ振り返ってみる。

⁷ この点に関する本稿の結論を先取りして言うと、「偶像は、創唱宗教か自然宗教かを問わず、いかなる宗教においても欠かすことのできない要素として多分に存在するが、偶像崇拜は、いかなる宗教においても存在する余地がない」。

カリスマとは、まず——そしてこの場合にのみ十全な意味でその名に値するのであるが——生来それを所有している物ないしは人にもっぱら宿り、なにものをもってしても手に入れることのできない、一つの賜物である。それ以外の場合には、それはなんらかの——もちろん非日常的な——手段を介して、物ないしは人に人為的に付与されうるし、またそうされねばならない。このような媒介が行なわれる場合、そこには次のような想定が含まれている。すなわち、カリスマの諸能力は、それらを萌芽の状態ですら宿していない物や人においてはもちろん展開されうべくもないが、しかしこの萌芽とて、もし人がそれを発展させなければ、つまりカリスマを——例えば「禁欲」によって——「呼びさます」ことがなければ、いつまでも隠されたままにとどまるであろう、という想定である。〔ウェーバー 1976:4-5〕

「カリスマ」とは、非日常的なもののみなされた（元来は、予言者にあっても、医術師にあっても、法の賢者にあっても、狩猟の指導者にあっても、軍事英雄にあっても、呪術的条件にもとづくものとみなされた）・ある人物の資質をいう。この資質の故に、彼は、超自然的または超人間的または少なくとも特殊非日常的な・誰でもかもちうるとはいえないような力や性質を恵まれていると評価され、あるいは神から遣わされたものとして、あるいは模範的として、またそれ故に「指導者」として評価されることになる。当該の資質が、何らかの倫理的・美的またはその他の観点からするとき、「客観的に」正しいと評価されるであろうかどうかは、いうまでもなく、この場合、概念にとっては全くどうでもよいことである。その資質が、カリスマ的被支配者、すなわち「帰依者」によって、事実上どのような評価されるか、ということだけが問題なのである。〔ウェーバー 1970:70〕

ウェーバーの「カリスマ」は、一見すると本稿で捉えなおそうとしている「偶像」と同一の事象を指しているようにも見えるかもしれないが、注意深く見ると以下のような、カリスマをカリスマたらしめる特有の特徴がいくつか挙げられている。

- ・カリスマとは「実体」概念ではなく「関係」概念であるということ。すなわち「担い手の特別な力／資質」をカリスマと呼ぶのではなく、「担い手と、担い手の特別な力／資質を感じたり認めたり影響を受けたりするフォロワーとの関係」をカリスマと呼ぶ。つまりウェーバーが論じるカリスマは、「カリスマ関係」を対象としているのである。
- ・カリスマの担い手が特別な力／資質の持ち主であるということは、フォロワーにとって疑いの余地がなく、まさしくオリジナル／本物であるということ。フォロワーの視点からすると、担い手の特別な力／資質（→ウェーバーの言う賜物）は、担い手に内在しており（宿っている、身籠っている）、いわば担い手が生来的／生得的に有して一手に独占している固有の力である。したがってフォロワーは、担い手を自分たちと同じ普通の人間（たとえば単なる代表者）としては見ておらず、目前にし

ている担い手の実物そのものを超自然的・超人間的な別格の存在として、全身で感じ取っているのである。

- ・カリスマ関係は「理性と常識にのっとった正常な人間関係」ではなく「感情・感動・衝動から突発的に生じる異常な人間関係」であるということ。このことを強調するに当たってウェーバーは、カリスマ関係が「不安定であること」「変動期に生じやすい（あるいは革命の原動力になりやすい）こと」「情緒的行為⁸であること」、というふうに繰り返し補足説明を加えている。

「カリスマ」と「偶像」を比較し、共通点と相違点を見出すための準備として、両者を同じ土俵に乗せる手続きを行う必要がある。すなわち両概念を一つの枠組みの中に入れ、同じ尺度（用語法）を用いて、その中の諸要素を比べて見る。するとカリスマにしても偶像にしても、次のような枠組みと諸要素から成り立っているものと見ることができのではないか。

【担い手】

「カリスマ」または「偶像」と言ったとき、われわれは通常そうした特性をもっている「担い手」を一次的に指す。この場合の担い手は、カリスマにしても偶像にしても、その実体は人型であり、つまり生身の人間または人型の物体・イメージのかたちをとることができる。カリスマに関しては、特に社会学的な文脈の中では、担い手を生身の人間に限定することがあるが⁹、宗教学／宗教心理学的な文脈の中では、生身の人間以外にも適用可能と見ている。ウェーバーのカリスマ論では、「指導者／リーダー」「支配者」「預言者」などの語がよく使われている。これらの語はいずれも偶像には必ずしも当てはまらないが、担い手の存在は両者にとっての基本要素である。

⁸ ウェーバー宗教社会学の重要構想（類型論／タイプ論）の一つに「社会的行為」がある。その中でウェーバーは社会的行為を行為者の動機の視点から分類し、①目的合理的行為、②価値合理的行為、③情緒的行為、④伝統的行為、の四つの類型／タイプを立てた。カリスマ的支配（カリスマ関係）におけるフォロワーの行為は、③情緒的行為の典型とされる。詳しくはウェーバー [1987:35-38]を参照。このような枠組みから見ると、偶像関係は②価値合理的行為に近いと言える。

⁹ 実はウェーバー自身、カリスマ論を展開する中で、以下の引用にあるように、最初からカリスマを生身の人間に宿るものであると限定したわけではない。「呪術的な行為者自身は、さしあたり、彼が惹き起こす諸現象の日常性が相対的に多いか少ないかという点によってのみ、他の人々から区別される。任意のどんな石でもが、例えば呪物として使用されるのではないし、また任意のどんな人でもが、忘我の状態に入って氣象的、治癒的、神占的、または読心術的な作用をもたらすでもない。そのような作用は、経験を積んだのちしかるべきときにいたってのみ達せられるものである。必ずしもこれだけとは限らないが、主としてこのような非日常的な諸能力が、『mana』とか『オレンダ』とか、あるいはイラン人のもとでは『マガ』（ここから呪術的という語が派生する）とかいう、特殊な名称を与えられているのである。われわれはここで、これらの諸能力に対して、一括して『カリスマ』という名称を用いたいと思う。[ウェーバー 1976:4]

【フォロワー】

担い手に人々が注目したり関心をもったり恐れたり近寄ったり敬遠したり群がったりして特別な関係を築く、というのがカリスマまたは偶像の基本パターンであるが、この場合の人々のことを「フォロワー」と呼ぶ。ウェーバーのカリスマ論では、「帰依者」「追従者」「被支配者」などの語が使われている。これらの語はいずれも偶像には必ずしも当てはまらないが、フォロワーの存在は両者にとっての基本要素である。

【聖なる力】

フォロワーが注目したり関心をもったり恐れたり近寄ったり敬遠したり群がったりするのは、担い手の側に何かしらの「力」が関係しているからである。それはこの場合の「聖なるもの」に当たり、「聖なる力」と呼ぶことができる。ウェーバーのカリスマ論では、「超自然的力」「超人間的力」「非日常的な力」「特別な資質」「神の賜物」などの語が使われている。これらの語はいずれも偶像には必ずしも当てはまらないが、聖なる力の存在が中心的な基本要素であるということは、カリスマの場合も偶像の場合も同じである。

【多次元世界】

カリスマにしても偶像にしても、フォロワーと担い手は、物理的／視覚的にはあたかも同じ世界（この世／俗世界）にいるのだが、「聖なる力」の存在は、フォロワーのいる世界とは異なる次元に属し、一定濃度の「聖なるリアリティ」として、その場において何らかの経路で紹介しているものと仮定する必要がある。カリスマと偶像に関する人間事象を宗教学的に探究するには、このような聖なるリアリティや次元（聖性）を、とりわけフォロワーの宗教的行為を動機付けたり方向付けたりする重要な要素として考慮しなければならない。カリスマまたは偶像の担い手がフォロワーと関係して

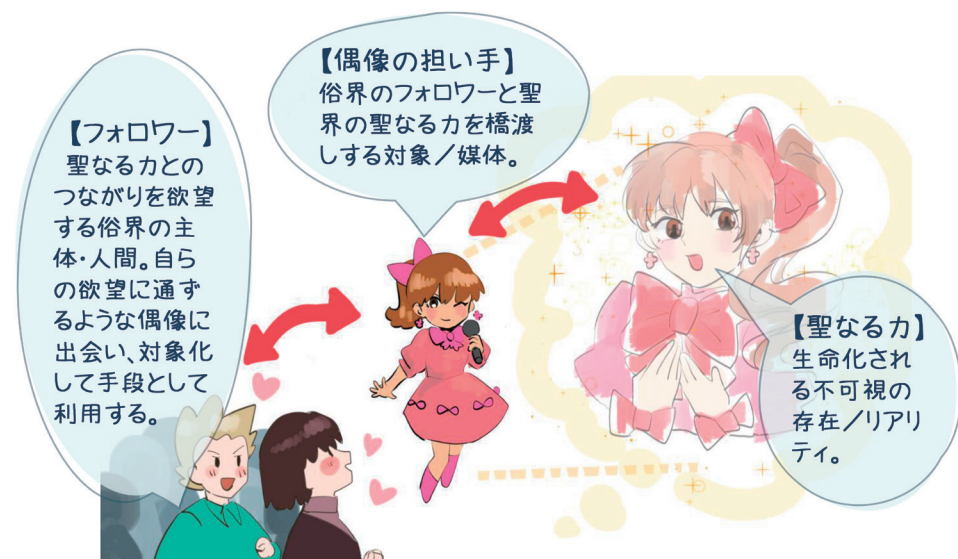


【図・1】カリスマ関係

いるとき、担い手は、俗なる日常の世界にいるフォロワーに対し、自らが有する／関係している聖なる力とつながるように、仲介／媒体の役割を果たすものと見ることができる。つまりカリスマまたは偶像が現に活性化して機能している場においては、「俗なる世界（俗界）」「聖なる世界（聖界）」「俗界と聖界を橋渡しする中間の世界（媒体）」という3つの世界が絡み合って多次元世界を構成しているものと見ることができる。

以上のようにカリスマと偶像に通ずる共通の枠組みと諸要素の視点から見ると、カリスマ的事象は前ページのように図式化できる（図・1）。この場合のフォロワーとカリスマの担い手の関係（カリスマ関係）は、両者が俗界の中で出会って交流するというものだが、フォロワーは、担い手が聖なる力を“所有している”（あるいは“身籠っている”）とみなす。つまりフォロワーは、担い手と一体化した「聖なる力／世界」との実質的な接触を経験する。フォロワーの目に映るカリスマの担い手は、聖なるものそのものであり、疑いの余地がないオリジナル／本物である。「聖なる力」は聖界に属するリアリティであることから、このようなシチュエーションは、俗界にいるフォロワーが聖界にいるカリスマの担い手と実質的に直接接触することを意味する。つまり俗界と聖界が媒体を介さずに重なり合うというものである。

カリスマ関係におけるこうした聖俗関係（聖俗循環）の構図は、偶像関係（フォロワーと偶像の担い手の関係）と比較することによって、双方の特徴がより鮮明に見えてくるはずである。偶像関係の場合、フォロワーは、カリスマ関係と同様、俗界の中



【図・2】偶像関係

で偶像の担い手と接する。カリスマ関係と大きく異なるのは、フォロワーから見た偶像の担い手は、聖なるものそのものでもなければ聖なるものと一体化しているわけでもない。フォロワーは偶像の担い手を、聖なる力を所有している者としてではなく、聖なる力や世界に取り次いでくれる／引き合わせてくれる存在として見るのである(図・2)。偶像がフォロワーにとって重要な意味と役割を持つのは、それ以上でもそれ以下でもない。フォロワーから見れば、眼前の担い手は、自らが精神的に常々希求している最大の対象(聖なる力) そのものではないにしろ、聖なるもの(それが何であり何処にあってどのようにしたら出会えるのか)に案内して導いてくれる存在として、この世(俗界)にいながら聖なる力とつながる可能性をもたらせてくれる、この上ないありがたいものである。この場合の俗界と聖界の関係を場の視点から見ると、フォロワーの居場所はカリスマ関係の場合と同様、俗界に位置するが、「聖なる力／世界」は不可視のリアリティとしてその場には顕現せず、ただし偶像の担い手が何らかのパイプや道筋を示してくれる。偶像の担い手はカリスマの担い手とは違う意味で、俗界と聖界を橋渡しする「中間の世界(媒体)」の役割を果たす。

このようにカリスマ関係と偶像関係は、いずれも聖なる対象を欲望するという人間行為の基本的動機の上に成り立っているが、アクセス方法に明確な違いがある。カリスマ関係の場合、フォロワーは聖なる対象に直接接するが、偶像関係においてフォロワーが接するのは聖なる対象の「代用」「記号」「参照点」である。

カリスマ関係と偶像関係の対比から浮かぶ、もう一つ重要な相違点は、フォロワーの「主体性」もしくはフォロワーと担い手の「主従関係」である。カリスマ関係にしても偶像関係にしても、いずれも聖なる対象を求める行為や活動であるという点からすれば、行為者／アクターとしてのフォロワーの立ち居地は、対象に対する「主体」であると見るのが自然である。たしかに偶像関係の場合はその通りだが、カリスマ関係の場合はそうではない。

偶像関係の場合、フォロワーが偶像の担い手と交流するのは、聖なる力を欲望して主体的に探究しているからである。フォロワーは、聖なる力を追う旅の中で偶像の担い手に出会い、それが探し求めている聖なるものそのもの(本物)ではなく案内役に過ぎないと気づいても、交流を持続・深化させ、偶像を手がかりにしたり利用したりして、さらなる聖なるものを求める旅を続ける。そうした積極的な探究心がある限り、フォロワーは偶像関係の中で偶像を客体化／対象化し、自らが主体であり続けることができる。

一方、カリスマ関係の場合、聖なる力に対する欲望がフォロワーの行為・原動力になっている点は偶像関係と変わらないが、カリスマの担い手(オリジナル／本物の聖

なる力)に出会ったフォロワーは、聖なる力に圧倒されてしまうのが常である。その衝撃に耐えられず、フォロワーは我を失って恍惚状態に陥り、その時点で主体性を失い(というかカリスマの担い手に奪われ)、主従関係が逆転してしまうのである。すなわちカリスマの担い手が主体化し、フォロワーは客体化/対象化する。カリスマ関係の場合のフォロワーは、偶像関係に見られるような「担い手をどこまでも追及して聖なる力を見つけ出そうとする」という立場ではなく「担い手の圧倒的な聖なる力に怖気付いて、一方的に受身になる」という立場なのである。

以上のようにカリスマ関係と偶像関係を宗教的な行為/関係として対比してみたが、これはあくまでもそれぞれの関係形態が純粋なかたちとして現れた場合のことである。カリスマ関係と偶像関係は、人型を媒体とする聖俗関係(聖俗循環)に、相反するタイプ/理念型が存在していることを示すものであるが、実世界において純粋なかたちで現れることはほとんどなく、二極の間に広がる連続体のどこかの位置に、常に双方向に移動可能な状態で、いわゆるカリスマと偶像の中間形態として現われるのが常である。

冒頭で挙げた偶像の3種の形態(①キャラクター、②アイドル、③人形)を、人型を媒体とする実践的な(=現実世界で実際に観察できる)聖俗循環として研究する場合も、カリスマと偶像のいずれかのタイプに照らし合わせてどっちに当てはまるかを吟味するのではなく、「カリスマ・偶像関係」という中間形態の関係タイプとして捉えるべきである。

なぜ実世界では純粋な(または純粋に近い)カリスマ関係または偶像関係が存在しにくいのか。カリスマに関しては、フォロワーが担い手の傑出した非日常的な力に魅了されたり怖気付いたりして聖界に属する「聖なる力」そのものだと感じながらも、大抵の場合、自らは俗界の縛りから抜け出ることすら俗界を完全に放棄・解体することもできない(俗界の属性を完全に手放そうとしない)ため、眼前の担い手に完全な聖なるものへ導いてもらうよりも、自らの俗界の属性を担保してくれる(あるいは認めてくれる)ような、聖界とのつなぎ役を果たすものとして見るからである¹⁰。

偶像に関しても、フォロワーの心理が純粋な偶像関係の成立を妨げている。フォロワーは偶像の担い手を聖界との仲介役であると頭では捉えることができても、仲介役には聖なる力のかけらもない、というふうにはどうしても思えない(あるいは期待し

¹⁰ 純粋な(純粋に近い)カリスマ関係が実世界に存在することはありえないということではない。宗教の世界では、世界宗教の生成期における預言者や現代におけるカルト系の教団では現に存在する。ただしこうした純粋なカリスマ関係を可能にしているのは、フォロワーが俗界の属性を完全に手放したり俗界を完全に逃避したりすることも惜しまないという点である。

てしまう)からである。フォロワーの心理からすると、偶像の担い手に聖なる力との回路があるとすれば、その回路の向こう側だけに聖なる力が集中しているのではなく、たとえ一部であろうとこちら側にもそうした力や波動が感染したり伝播したりするはずである。あるいは少なくとも偶像の担い手には「つなぎ役」「取り次ぎ役」としての聖性があると感じるのである。聖なるものを金庫の中にある金貨に喩えるならば、偶像の担い手は金庫の鍵に相当し、この場合の鍵はイコール金貨ではないが、人々はこの鍵に、金貨の価値に等しい何かを見る。偶像とは、聖なるものとつながりをつなげてくれる、貴重な鍵または道標である¹¹。

ところでウェーバーも、カリスマを支配の一形態(タイプ)¹²の一つとした際、純粹なカリスマ的支配は、過去の宗教の預言者や軍事的・政治的な英雄において見られたように、世界宗教の誕生期、大きな戦争、革命期などにしか起きない稀な事象であるとした。純粹カリスマは、既存の秩序が根底から崩れるような、混沌とした状況の中からしか生まれてこないということである。このようなカリスマの性質とその温床となる環境・シチュエーションを、ウェーバーは「人格的／個人的／個性的」で「非日常的」なものとして特徴付けた。そしてカリスマ的支配は、時間が経つに連れ、「日常化」の過程が進み、合法的支配に傾いたり(官職カリスマなど)伝統的支配に傾いたり(世襲カリスマなど)しながら、いわゆる亜種(サブタイプ)を形成するようになる。こうしたカリスマの日常化は、フォロワーから見た担い手側の力の質の変化によるものとされる。すなわち「人格的／個人的／個性的」な力の質が制度的(合法的または伝統的)な力の質に変容する過程である。

しかしこのような若干曖昧さを残す位置づけが、後々、カリスマ研究の中で大きな論争となり、ウェーバーのカリスマ論を批判的に捉えたり修正の必要性を訴えたりする展開をもたらした。

¹¹ 純粹カリスマと純粹偶像の対比は、宗教の世界と芸術の世界の関係性についても、本質的な一面を説明しているように思われる。宗教も芸術も、至高的な世界(聖界または美の世界)につながるための媒体(宗教における人型媒体、芸術における作品)が重要な役割を果たす。芸術の場合、媒体(作品)にはオリジナリティが強く求められる。贋作・複製・大量生産された作品は当然、唯一無二のオリジナルの作品と比べ、美的価値をはじめとするすべての意味で価値が低いものとされる。興味深いことに宗教の場合は逆の傾向が見られる。宗教における唯一無二のオリジナルの人型媒体は、まさにカリスマ関係における特徴である。偶像関係における人型媒体は、常に複製・大量生産されるものである(贋作や二次創作を含む)。芸術における至高経験(美の経験)は、基本的には作品と同一の次元(この世／俗界)で達せられるものであるのに対し、宗教における至高経験(聖なる経験)は人型媒体が指し示す異次元(聖界)の世界とつながることによってのみ達せられるからである。芸術における夢や至高経験はこの世／俗界で実現することが可能だが、宗教のそれは、そもそもこの世／俗界の構造と体系に本質的に相容れるものではない。ゆえにフォロワーが聖界につながるためのほぼ唯一の手段として、この世／俗界で接することができる偶像は、「価値の低い贋作や複製」ではなく、ときには本物／オリジナルに等しいものにさえなりうる。

¹² 「合法的支配」「伝統的支配」「カリスマ的支配」からなる「支配の三類型」。

本稿の宗教学（聖俗循環）の枠組みから見ると、ウェーバーのカリスマ論をわかりにくくしている最大の問題は、「非日常・聖界に軸足を置いている力関係」を「日常・俗界に軸足を置いている力関係」と同じ軸の分類法に入れて同列に語っている点である¹³。合法的支配と伝統的支配——それが異なる二つの支配のタイプとして見るべきなのか、それとも同一の支配のパターンが単に異なる側面を活性化しているものと見るべきなのか、問題ではない——は、日常・俗界に軸足を置いている力関係である。一方、ウェーバーが論じる純粋なカリスマ的支配——もはや“支配”と呼ぶべきではない——は、非日常・聖界に軸足を置いている力関係である。それは、俗界の中の縛りと抑圧の中において自らの生命の響きにさえ鈍感になってしまった人々が、突如得体の知れない人型の存在に一気に目覚めさせられるという、既存のいかなる力関係にも、また力関係を表すいかなる概念や言葉にも還元しにくい、異常且つ無構造の力関係である。「支配」でも「権威」でも「権力」でも「リーダーシップ」でもなく、担い手によるリアルで圧倒的な「力と存在感のある人間性」が、無力化しているフォロワーをさらに無力化して一方的に包み込むという、野生化した人間模様である。

したがってウェーバーが論じる純粋なカリスマ関係は、日常・俗界とは別格のものとして位置づけることによって、十分想定可能なものになる。一方、「日常的カリスマ」（官職カリスマや世襲カリスマのような制度的カリスマ）は、元々純粋なカリスマ関係に近い力関係が過去にあって徐々に日常化・俗化したという場合でも、関係原理が「カリスマ」から「偶像」に明確にシフトしているので、「日常的なカリスマ関係」として見るよりも、「偶像関係」として見たほうがよいと思われる。ウェーバーが論じる「カリスマの日常化」——この場合は特に「カリスマ関係」から「偶像関係」への移行——は、たしかに実際に起こりうる力関係の変容過程であるが、その中で働いているもっとも重要な“変化”は、「聖性」と「場／文脈」に関することである。「非日常・聖界に軸足を置いている力関係」が「日常・俗界に軸足を置いている力関係」に移行するということは、フォロワーが担い手の存在／生命から経験することができる聖性が希薄化し、また非日常・聖界にまたがっていた行為や活動の場／文脈が、日常・俗界の枠内に移ってとどまるようになったことを意味するからである。

「担い手の聖性の希薄化」をよりの確に捉えるためには、まず現代の一般的なウェーバーのカリスマ論の解釈を、若干修正する必要がある。ウェーバーによるカリスマ関係の記述の中に、この力関係が「担い手の人格的／個人的／個性的な魅力」に由来するものであるというふうに読み取られる箇所が数箇所ある。これが、「純粋なカリスマ関係のタイプの特徴は担い手の人格的／個人的／個性的な魅力である」とい

¹³ 本稿とは違う方向の展開だが、似たような指摘はBendix [1960] において見られる。

う誤解を招いたと思われる。実際のところ、純粋なカリスマ関係の場合、フォロワーは担い手を“超人間的・超自然的”または“神的”という意味で“非人間的”な存在として感じ取っており、人間的に親しみを持てるような意味の「人格的／個人的／個性的な魅力」を感じ取るような隙間は存在しない。純粋なカリスマ関係は、一方が一方を慕うというような“人間同士”の関係とは程遠い力関係である。つまりウェーバーが触れている「担い手の人格的／個人的／個性的な魅力」とは、「純粋なカリスマ関係」のものではなく、「日常的なカリスマ関係」（＝偶像関係）の特徴である。カリスマの日常化過程は、担い手を人間的な次元に下ろすという意味で“人間化”または俗化する。この関連でウェーバーは、カリスマ関係の特徴として、フォロワーが担い手のことを“模範的”な存在とみなすとしたが、これも「日常的なカリスマ関係」（＝偶像関係）の特徴であると捉えるべきである。純粋なカリスマ関係の場合、担い手は非人間的な別格な存在であるため、主体性を失っているフォロワーは、単にその力の磁場に飲み込まれるだけであって、模範にしたり真似たりすることなど、到底できることではない。

したがって本稿に沿って再構成するならば、「合法的な力関係」「伝統的な力関係」「偶像的な力関係（日常的なカリスマ関係）」は、支配の3類型として見るよりも、「日常・俗界に軸足を置いている力関係」において、3種の担い手の特質のいずれかが比較的顕著に現れる（フォロワーに感じられる／承認される／経験される）ときの形態であると見たほうがよい。すなわち「合法的力関係」は担い手の合法的な正当性、「伝統的力関係」は担い手の伝統的な正当性、「偶像的力関係」は担い手の人格的／個人的／個性的な魅力が、それぞれフォロワーの側から見て活性化する場合である。なお、このような「3種の担い手の特質」のいずれもが、カリスマ性を含むことができ、また日常化の過程に晒されることもある。この場合のカリスマの日常化は、カリスマ関係が、偶像関係に移行する過程と同様、合法的な力関係または伝統的な力関係に移行するというものである。また、「力関係」そのものが希薄化して消滅の方向に向かうということである。もちろん、「日常化」も「俗化」も一方通行の過程ではない。合法的・伝統的・偶像的な力関係に移行したカリスマ関係寄りの力関係、あるいは力関係の希薄化や消滅の方向に向かっている合法的力関係・伝統的力関係・偶像的力関係が、非日常化・聖化という逆の過程によって再び「カリスマ関係」または3種の「日常・俗界に軸足を置いている力関係」が活性化することは、よくあることである。

2. “アイコン” という偶像

正教会・東方教会をはじめとするオーソドックスのキリスト教の儀礼で重要な役割を果たす聖画像（聖像）「アイコン」は、「仏像」と並んで宗教的世界における偶像の代表格であり、宗教研究の視点から見ると、前述した偶像の諸特徴をさらに深く物語ってくれる対象である。

アイコンという語そのものは「写し」「似姿」を意味するギリシア語に由来する。正教会による宗教的な意味づけも、こうした語の由来から推測可能な範囲内のものと言えよう。すなわちアイコンは崇拜対象（神そのもの、神的なもの）ではなく、人と神（神的な世界、神的な心）を橋渡しする“媒介”であるとされる。人はあくまでもアイコンの背後にある「オリジナル」や「モデル」に対し、崇拜や帰依の念を捧げるのであって、決してアイコンの偶像崇拜を行っているわけではない。

「オリジナルではなく媒介である」「崇拜対象ではない」という正教会側のアイコンに対する位置づけ（言い分）¹⁴は、本稿で展開した「人型媒体（カリスマと偶像）」に関する考察とも一致しており、わかりやすい見解ではあるが、当のキリスト教世界の内部でこのような論争が起こったこと、すなわち「偶像崇拜」という概念の矛盾と、そうした行為が不可能であることを実践者の立場から主張したということは、とても興味深い。

宗教学的に見ると、おおよそすべての宗教に通ずるメカニズムとして、「不可視の次元の『聖なるもの』と連なるための手段として『儀礼』を媒介とする」という基本原理がある。儀礼という媒体は、「イメージ」と「モノ」のかたちを集約される場合もあれば「行為」（言語を含む一連の手続き）のかたちに重点が置かれる場合もある。多くはこれらの組み合わせからなる。つまり宗教（聖俗循環）という営みは常に、「俗界のアクター」と「聖界のエージェント」の二者から成り立っており、その中間に「媒

¹⁴ 正教会の儀礼で用いられるアイコンはキリスト教で禁じられている「偶像崇拜」に当たるのではないかという論争が、キリスト教世界の内部（ときのビザンチン帝国）で724年から843年にかけて起き、「アイコン破壊運動（イコノクラスム）」にまで発展した。当時のキリスト教世界で問題指摘された点は、キリストは神であり、神の姿は描くことができるのか、描けるとすると、偶像崇拜ではないか、神は不可視であり、神と人間との間には超えがたい断絶がある（旧約聖書）、というものである。こうした聖像論争によって、ときの皇帝は、イコノクラスム派とイコノデュール（聖像画擁護）派とが交替するたびに政治的出来事に直面し、幾度か公会議が開かれた。843年に、皇帝ミカエル3世によってアイコン崇敬は復活され、イコノクラスムは終結したとされる。その際に根拠として挙げられたのは、「神は人として現れた。だから描くことができる。神の似姿（アイコン）は許容される。しかし描かれたものは神そのものではなく、神の写しでしかない。神への崇敬はラトレイア（絶対的な崇敬）であり、アイコンへの崇敬はプロスキネーシス（相対的な崇敬）でなければならない。アイコンに対してラトレイアの崇敬をすることは、偶像崇拜である。」というものである。正教会のアイコン全般に関することは、次の著書を参照。カヴァルノス [1999]、バイツマン [1984]、高橋 [1981, 1990, 1992]。

体」が存在するのである。「媒体」や「媒介の機能」をもたず、前者が後者と直接的に一体化したりつながったりするという関係は、あるとしても、宗教という社会的・人間的な事象として認知されることはないであろう。

となると、イコンは「オリジナルではなく媒介である」「崇拝対象ではない」という正教会による位置づけは、あえて主張するまでもない、当たり前のことであると言える。むしろ、これを偶像崇拝ではないかと疑うような、その反対の見解のほうに、最初から誤解があったのではないだろうか。

宗教の基本メカニズムが、当の宗教の信念・観念・教義のレベルにおいてもアクターの経験的・実践的なレベルにおいても、「俗界」⇔「媒体」⇔「聖界」という構図として働いているのであれば、そもそも偶像崇拝（媒体崇拝）という宗教的行為は存在する余地がないのではないか。あるいは偶像崇拝とは、他宗教に対する理解不足から来た誤った見方として定着した概念ではないのか。この問いの答えは、世界宗教の中で偶像崇拝の典型例として一般に誤解されている、仏教における仏像（日本の「お地藏さん」を含む）を正教会におけるイコンと比較して吟味することで、何らかの手がかりが得られるはずである。

その前に、そもそもイコンは正教会の中で、具体的にどのように偶像としての役割を果たしているのか、前述したカリスマと偶像の基本要素と枠組みに沿って簡単におさらいしてみる。偶像の基本要素である《フォロワー》《担い手＝媒体》《聖なる力》に関しては、イコンの場合、次のように定義できる。

【フォロワー（俗界のアクター）】

正教会／東方教会の儀礼（ミサなどの礼拝）に参加する信者。

【カリスマまたは偶像の担い手（対象／媒体）】

教会または信者の自宅に安置されているイコン画、すなわちキャラクターの形態をとった偶像的な人型媒体である。イコンのキャンバスに描かれている対象（キャラクター）は、主にイエス・キリストと聖母マリアの肖像または祝祭にまつわるシーンや出来事である。そのほか個々の地域・民族にまつわる伝説や神話に基づく聖人、そして大司教や英雄を描いたイコンも制作されている。

【聖なる力】

信者が捉えている正教会の教義の通り、一次的には「唯一神」「神的なもの」「神の領域」であり、二次的には「信者自身の純粋な心」「祈りを捧げる信者の心」「模範的な生活様式を表す人格／人間性」である。この場合の聖なる力は「聖界のエージェント」と呼ぶのに相応しい。

正教会では、信者（フォロワー）がアイコン（担い手＝媒体）を通して聖なる力へつながるための場（文脈）の工夫が行われている。礼拝中に一般的に見られる工夫としては、場の全体的な空気がアイコンによって満たされるように、精神の上昇を誘う合唱や音楽が流れる。その中でよく見られる光景として、信者たちがアイコンの前で十字を切り、またアイコンに顔を寄せたり接吻したりする一連の行為である。全般的には、正教会の儀礼の際のアイコンの役割は、「聖堂を美化すること」「信仰をよりわかり易く教授すること」「聖なる空間へ信者をいざなうこと（聖なる経験を刺激すること）」「信者が属する集団や民族のアイデンティティを自覚すること」といふように特徴付けてもよいのではないか。なおアイコンの活用形態については、ロシア正教会では教会内での礼拝にとどまらず、護身¹⁵や濃厚儀礼¹⁶に用いられる場合もある。正教会側はしばしば「アイコンは『観るもの』である以上に『読むもの』である」と説明する。たしかに、アイコンをしっかり鑑賞するには、キリスト教聖書の神話・物語に関する一定の基礎知識（該当するコードの事前学習や習得）が要される。つまり記号論的に見ると、アイコンにおけるシニフィアン（キャラクターの形態）とシニフィエ（信者の心の中でイメージする聖なる力）の関係は「アイコンの原理（→類似性）」と同時に「シンボルの原理」が強く働いているものと言える。ただしこうしたことは正教会の聖画像に限ることではない。キャラクターの形態をとった偶像は大抵、一見すると「アイコンの原理」が、聖俗循環の媒介の機能として顕著に働いていると思われるが、実際は「インデックスの原理（→近接性）」と「シンボルの原理」も同等以上に顕著に働いている。現代日本のサブカルチャーの中の偶像（特にキャラクター）について全般的に言うと、「原作」（漫画、アニメ、ライトノベル、小説など）の存在が「シンボルの原理」を、そして「聖地」の存在が「インデックスの原理」を活性化しているものと思われる。

さて、アイコンと仏像を宗教的な（聖俗循環の）「媒体」として見て比較すると、いずれも聖俗循環を実現する偶像的な人型媒体であるが、形態面と機能面に違いがある。形態面から見るとアイコンは「キャラクター」であり、仏像は主に「人形」のかたちをとる。機能面に関する両者の相違点は、「聖なる力（聖界のエージェント）」の捉え方にあると言える。正教会のアイコンの場合、フォロワーが対面する際に思い浮かべる聖界のエージェントは、個々のアイコンに描かれている人物（イエス・キリスト、聖母マリア、聖人など）の人格や個性を超越して出会う、唯一神という人格的な一つの存在に絞ることができる。一方、仏像の場合、フォロワーが対面する際に思い浮かべ

¹⁵ 「戦争の際に先頭に掲げられ、敵軍の矢がアイコンの聖母像の左目にあたった途端に敵軍は光を失って敗退した」というような奇跡を起こしたとアイコンの言い伝えが知られている。

¹⁶ 聖女・ピャートニツァのアイコンが収穫の祈願として村を三周するという儀礼が知られている。

る聖界のエージェントは、個々の仏像に描かれている人物（仏、菩薩）の人格や個性を必ずしも（あるいは容易に）超越してたどるというのではなく、あるいは超越したとしても、たどる境地は究極的には特定しえない“すべて”（宇宙・森羅万象と人の心を含むあまねく存在やその真髄・核心）である。これは、一神教と多神教や汎神論との違いから来た相違点であるとも言える。

このような点を考慮すると、たしかにアイコンと仏像とでは、いずれも宗教的な人型媒体として機能しているものの、媒体の資質に何か目立った違いがあることがうかがわれる。アイコンの背景にあるキリスト教の宗教的世界においては、“志向する聖なる力”は、すでに人格的な実体であるとされ、“俗界にいるアクター”とつながるための道筋は、最初からある程度の規定性を受けている。アイコンのような媒体は、正教会の宗教的世界において、とても効率性のよい聖俗循環の媒体であるが、より広いキリスト教の宗教的世界においては、人格の伴わない（人型以外の）媒体でも、媒介の機能を果たすことは可能である。一方の仏像は、“志向する聖なる力”が究極的には漠然とした壮大なリアリティであるため、媒体が果たす最大の役割は、“俗界にいるアクター”を——漠然とした壮大なリアリティにいきなり迷い込まないように——偶像の形態・身体に焦点を当てて引き寄せることである。仏像の媒体を重視する仏教の宗教的世界においては、媒介の機能を十分に果たすことができる人型媒体とは、アクターを俗界の中で引きつけて導く力をもつものであり、それは必然的に“模範的な人格／人間性”を秘めた媒体である。

したがってアイコンを含むキリスト教における種々の媒体は、“媒介”の役割をきわめて重視していると言える。媒体は、あくまでも俗界と聖界のつながりを手助けするための手段・道具であり、媒体そのものに聖なる力が包含されているということは、あってもさほど大きくはない。正教会の教義において語られている通り、アイコンという媒体は、聖界に通ずるための鏡・窓・扉に喩えることができる。すなわち本質を投影したり通過させたりするが、本質そのものではないということである。一方の仏像も、本質を投影したり通過させたりして、聖界に通ずるための鏡・窓・扉の役割を担うが、それは無人格の静的な鏡・窓・扉ではなく、聖なる力と聖界のエージェントを、部分的であれ、自らの形態・身体に宿らせている“生きている”人型媒体である。仏像は、個々の程度の差はあれ、自らも人格と自立性・主体性をもった、聖界のエージェントの代理人であることが見える。ゆえに仏教の宗教的世界では、仏像はときには、不可視の次元の聖なる力と聖界のエージェントを、俗界の可視的な次元で具現化する「化身」または「権化」とみなされる。

前述した「カリスマと偶像関係」の図式から見ると、正教会のアイコンはどちらかと

いうとカリスマと偶像の間に広がる連続体の中の、かなり偶像関係寄りの位置にあり、仏教の仏像は全般的にカリスマと偶像の中間に位置し、中にはカリスマ関係寄りの位置にあると見ることはできるのではないか。

最後に正教会のイコンの偶像性を理解するために役立つ、山下りんに関するエピソードを簡単に見てみたい¹⁷。山下りん（1857～1939）は、茨城県笠間市出身の日本人初のイコン画家である。工部美術学校に入学し、イタリアの画家アントニオ・フォンタネージの指導を受け、在学中にロシア正教会に改宗した。その後、ロシア・ペテルブルクに留学し、女子修道院に入ってイコン画の修行に入った。しかしイコンの「型にはまった、忠実な模写だけを重んじ、個性・創造性・自由性・多様性を許さない」創作手法に馴染めず、「おぼけ画ではなくイタリア・西洋画を描きたい」という趣旨のことを日記に残し、予定していた5年間の留学期間を繰り上げて2年で帰国した。一時正教会からも脱会したが、後に復帰し、日本正教会の女子神学校にアトリエを構え、自らの感性を活かしたイコン創作に没頭した。現在までも日本正教会に安置されているイコンの300点以上が、山下りん作である。

宗教学（聖俗循環）の視点から見ると、山下りんのエピソードが物語っている最大のポイントは、イコンに描かれている人物像（人型の被写体／対象）が、偶像性に傾くのか、それともカリスマ性に傾くのか、という岐路である。ロシア正教会におけるイコン創作の伝統的な鉄則は、「忠実に模写するだけで作成すること」「平面的に描くこと（遠近法と立体感をもたらす表現手法の否定）」「画家の個性と自由で多様な想像力を絵の中に組み込まないこと」の3つに絞られる。この3つの鉄則は、端的に言うと、「芸術性の徹底的な否定」であるに他ならない。それに真っ向から反発し、偶像的なイコンに芸術性を排除しないという独自の道を切り開いたのが山下りんではないだろうか。彼女は、イコンに描かれている人物像が聖界のエージェントと連なっていること——つまり目前に描かれているものは媒体であって、本物（オリジナル）は向こうの世界にいるんだということ——を十分認識しているのだが、でもだからといって自らの手で描いて生み出すイコンに何の個性も価値も力も注がれないというような創作手法には、馴染めなかったのではないか。つまり彼女にとってイコンとは、聖界のエージェントとのつながり（媒介の機能）が担保される範囲内で、担い手（イコン画そのもの）の生命力がフォロワーに伝わるべきものなのである。イコンが生命力を発揮するように画家が手を施すことが、イコール芸術性とカリスマ性を高めることである。

したがって山下りんが行ったことは、本稿のカリスマと偶像関係の図式から見る

¹⁷ 山下りんについては次の著書を参照。小田 [1977,1980]、大下 [2004]、NHK [2014]。

と、きわめて偶像関係寄りだったアイコンを、ややカリスマ関係寄りの人型媒体にシフトさせたことである。このことが、山下りん作のアイコンが日本の正教会の信者に、豊かな個性と人格をもった人間味のある人型媒体として大いに歓迎された所以である。日本の正教会の信者の目には、山下りん作のアイコンに描かれた人物（とりわけ聖母マリア）は、単純に縁遠い異邦人には見えず、何か自分たちと共有したりつながっていたりするものがあり、あるいは自分たちのルーツと無関係ではないということが感じ取られる。おそらくそれは、山下りんが無心になって人物を忠実に模写するという描き方をせず、人物に関する基本情報を絵の骨格として堅持しつつ、自らの「思い」「感情」「生きる実感」を絵の中に滲ませたからではないだろうか。先の金庫の比喻で言うと、由緒あるアイコン（原本）を現代のアイコン画家が模写（再生産／reproduce）するということは、合鍵を作ることに等しい行為である。一方のロシア正教会の立場から言うと、合鍵は、マスターキーに刻まれている金庫を開けるための秘密（ギザギザ山）をそっくり複製しなければ役目を果たすことができないので、鍵の材質・形状・色・サイズ・模様・装飾等を忠実に再現し、すべての面においてわずかなズレも許さない「クローン」を作ることである。結果として合鍵そのものには何の特徴も個性もなく、また合鍵の使用者が美的その他の観点から、そのものに関心を寄せたり引き付けられたりすることがなくても、聖俗循環のつながりさえ担保されれば何ら問題にはならない。他方の山下りんの立場から言うと、合鍵には、マスターキーに刻まれている金庫を開けるために必須な秘密（ギザギザ山）だけは忠実に再現するが、それ以外の鍵の材質・形状・色・サイズ・模様・装飾等は、クローンを仕立てるようなことをするよりも、むしろ独自の特徴と個性を与え、合鍵そのものの価値を高めるべきだとした。そしてそれが結果的には、使用者が合鍵そのものに愛着を抱き、いつも手元に置いて重宝し、使うたびに満足感や達成感を得ることができた。

しかしこうして見ると、山下りん作のアイコンが「ややカリスマ関係寄り」で、ロシア正教会の伝統的なアイコンが「きわめて偶像関係寄り」であるというのは、フォロワーが山下りんと同じ文化圏の中に生きる日本人だからなのか、新たな疑問が浮かんでくる。つまりロシア正教会の信者にとって、伝統的なアイコンに描かれた人物は、忠実に複製された姿であっても一定のカリスマ性が感じ取られ、決して日本人の目に映るような縁遠い異邦人ではないのかもしれない。この疑問に関して本稿は、中道的な解釈をとっている。すなわちロシア正教会の信者（フォロワー）にとって伝統的なアイコン（偶像の担い手）そのものに一定の「聖なる力」が感じ取られるということは、正教会が現にいまも存在して宗教的な（聖俗循環の）機能を果たし続けていることから、疑う余地はない。一定の偏りをもった「カリスマ・偶像関係」が成立している

ものと見る。しかしその一方で前述したように、カリスマ関係は時間が経つに連れ、日常化・俗化に晒されるという傾向に置かれている。したがってロシア正教会の場合も、担い手（アイコンという平面的なキャラクター）の聖性を再活性化するような工夫等がなされなければ、おのずと偶像関係寄りの力関係、あるいはさらに力関係そのものが希薄化・消滅化するという方向に傾くであろう。

ということは、山下りんがロシア正教会伝来のアイコン創作の鉄則を大胆にも破ったのは、ある意味で、日常化・俗化の波に晒されたアイコンの聖性を再活性化するための、体を張っての“聖なる闘争”だというふうに見ることも可能ではないだろうか。

3. “キャラ”という偶像

キャラクターは偶像の一形態である。現代日本において、聖俗循環が実際に機能している「偶像」を研究対象とするならば、キャラクターに関する事例は筆頭に挙げるべきであろう。とりわけ若者が主体となって盛んに行なっている「キャラ活」（キャラクターを実体化する活動）は、現代日本における顕著な聖俗循環の場であると言える¹⁸。なお本稿で“キャラ”と呼んでいるのは、“キャラクター”とは若干区別している¹⁹概念である。この点も含めて以下より、キャラ活をラカン派精神分析の視点から論じながら捉えてみる。

キャラ活（「キャラクターを実体化する活動」の略）とは、次のように定義できる。すなわち信者・フォロワー・ファン・オーディエンス（主体／アクター）が、聖典・教典・小説・物語・神話・伝説、映画・アニメ、漫画、ゲーム、演劇、ライブ・舞台、スポーツ大会・試合、祭り、文化的な催し・儀礼・行事・イベント・パフォーマンス、ネット上の断片的なイメージ・動画・ストーリーなど、人々が人間界の日常生活の中でアクセス可能な対象（媒体）に受動的に参加したり観たり読んだり遊んだり鑑賞したり関係・交流したりするにとどまらず、こうした対象から浮かび上がる登場人物・中心人物・主人公・主役・担い手の諸特徴（性格的な面のみならず容姿・表情・声・瞳・眼差し・動作・行為・話し方・話の内容・癖などの身体面・知性面・活動面を含む）を一般化した人格／性格（→キャラクター）として捉え、さらにそれを一定のイ

¹⁸ キャラ活に関しては、アラム [2014, 2015, 2019, 2020, 2022] による構想に基づいている。

¹⁹ 伊藤 [2014:88-89] が論じた“キャラ”と“キャラクター”の違いは、アニメと漫画をはじめとする現代日本サブカルチャー研究の中で、かなり定着した枠組みとなった。これによると、「キャラクター」は人の“性格”や“人格”のことを指す（生身の人間に対しても、アニメ・漫画・ゲーム・映画・小説などの媒体の中の主人公／登場人物に対しても、用いることができる）。一方の「キャラ」は「キャラクターがシンプルなシニフィアンだけで捉えることができる記号化したイメージ」のことを指す。本稿は、こうした区別を踏襲しつつ、若干の視点とニュアンスも込めている。

メージ／記号（→キャラ）のレベルに抽象化（理想化・タイプ化）し、こうしたキャラに対して抱く特別な感情（プラス・マイナスからなる欲望）の反応／フォローとして、同キャラの実体化に向けた積極的な働きかけ（転移）を反復的に行い、自らの人格的な存在（自我）の鏡として、想像界にまで連なる、活気に満ちた新たな世界／人間関係（生命ネットワーク）を持続的に実現・結ぶ活動、のことである。

キャラ活は一見、日常的に行われている単純な活動であるかのように思えるが、その行為の全体を精査すると、日常的な世界（人間界または俗界）に収まるものではなく、主体に、濃厚な聖俗循環に値する精神的な経験をもたらすものであることがわかる。キャラ活における聖俗循環は、生命が生きる次の3つの世界／次元のうち、少なくとも「人間界」と「想像界」の二つの世界をまたがって行われ、ときには「自然界」にも連なる可能性も秘めている。

【自然界²⁰】「赤子が生まれたばかりの世界（鏡の中の自分に気づく前の世界²¹）」「野生動物が生きる世界」「人間が言葉を使う以前の世界」。自然界は、赤子の身体・言語能力が発達して自我が芽生えたときから徐々に遠のき、大人になったときは、意識することも感じることもアクセスすることも、ほぼできなくなる。自然界の最大の特徴は「個々の生命体が外界／自然界とバランスの良い主客関係を結んでいる（外的な作用に完全に客体化されず、一定の主体性を發揮している）」点と、「生命とすべての対象との関係が直接的／身体的／生命的である」点だと言える。

【想像界²²】 乳児の場合は主に、自分が映し出される鏡の世界。子供の場合は主に、「遊びの世界」（言語・記号を用いる遊びを含む）。大人の場合は主に、小説・物語・神話・伝説・聖典・経典、映画、漫画、アニメ、ゲーム、ネット、演劇、ライブ・舞台、スポーツ大会・試合など、言語的・記号的な「虚構の世界」に相当する。本稿では「虚構fiction／2Dの世界」と「仮想virtual/2.5Dの世界」を若干区別している。どちらかというとな前者はそっくり想像界に相当し、後者は想像界と人間界の中間的な世界（あるいは想像界によって“塗り替えられた”人間界）に相当する。

【人間界²³】 赤子が身体・言語能力の発達による自我の誕生過程を経て強制的に入れられる人間の世界。俗に言う「<文明>社会」や「文化」に相当し、いわゆる言葉を媒介とする言語的・記号的な人間関係の世界である。あるいは今日のわれわれが通常「現実」「リアリティ」「日常の世界」「俗界」と呼んでいる世界のことである。人間界の

²⁰ ラカン派精神分析で言うところの「現実界」。

²¹ ラカン派精神分析で言うところの「鏡像段階」。

²² ラカン派精神分析と、ほぼ同概念。

²³ ラカン派精神分析で言うところの「象徴界」。

最大の特徴は「生命間のつながり、および生命とすべての対象との関係が言語・記号・概念に媒介される間接的な関係になっている」点と、「主体性が弱体化し、他者が規定する自我に取って代わられる」点だと言える。

キャラ活は、「人間界」の中で行われる活動であるが、「想像界」を志向するものである。このことを、【図・3】【図・4】【図・5】では、「アニメキャラクターの二次創作」「ナースのコスプレ」「アイドルの応援」を活動内容とした各キャラ活の活動図式を通して示している。

前述したカリスマと偶像の基本要素の枠組みに照らして見ると、3種のキャラ活における《フォロワー》《担い手（対象／媒体）》《聖なる力》は、次のように一括して定義できる。

【フォロワー（俗界のアクター）】

【図・3】 アニメファン、【図・4】 コスプレイヤー、【図・5】 アイドルファン。

【カリスマまたは偶像の担い手（対象／媒体）】

【図・3】 キャラクター（アニメの登場人物／ヒロイン）。

【図・4】 キャラクター（女性看護師という役割／職業／サービス）。

【図・5】 キャラクター（アイドル化したシンガー）。

【聖なる力】

【図・3】【図・4】【図・5】はいずれも偶像関係（場合によっては「カリスマ・偶像関係」）を表しており、この場合の聖なる力は、いずれも「キャラクター」を「キャラ」化し、さらに「実体」化することによってフォロワーが“垣間見る程度に気付く／実感する／経験することが可能になるかもしれない”自らの生命であると推測できる。すなわち想像界の対象（キャラクター）とイメージ（キャラ）を自らに取り込む（または模倣する）ことによって起きる、人間界／俗界の束縛（とりわけ個々のキャラクターまたは自我に対する規定性）からの解放・着替え・塗り替え（【図・6】を参照）と、その際に顕現される可能性のある、自らのありのまま（バランスの良い主客関係）の生命である。

キャラ活を通して果たされるかもしれない、このような聖なる力（自然界／聖界）への接触とアクセスは、主体が対象（この場合はキャラクター）と出会ったときに、一定の「欲望」に気付かされたり目覚めたりして、「転移」し、そうしたプロセスが反復的に行われた暁には、「生命ネットワーク」が形成されるからである。「欲望」「転移」「生命ネットワーク」に関しては、次のように捉える。

【図・3】アニメキャラクターの二次創作

【1. 対象】

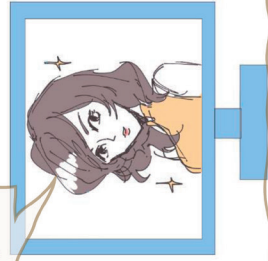
漫画の紙面とアニメのスクリーン(メディア)に登場する、ヒロインの一般化された人格(⇒キャラクター)。

⇒想像界

【3. 参照するイメージの創造】

主体は自らの欲望に触発または動機付けられ、漫画・アニメの登場人物・ヒロインを理想化/美化/タイアップし、一定の人間的特徴を表すイメージ/記号(⇒キャラクター)を、ファン間で共有・協同して作り出す。

⇒想像界にアクセスする主体



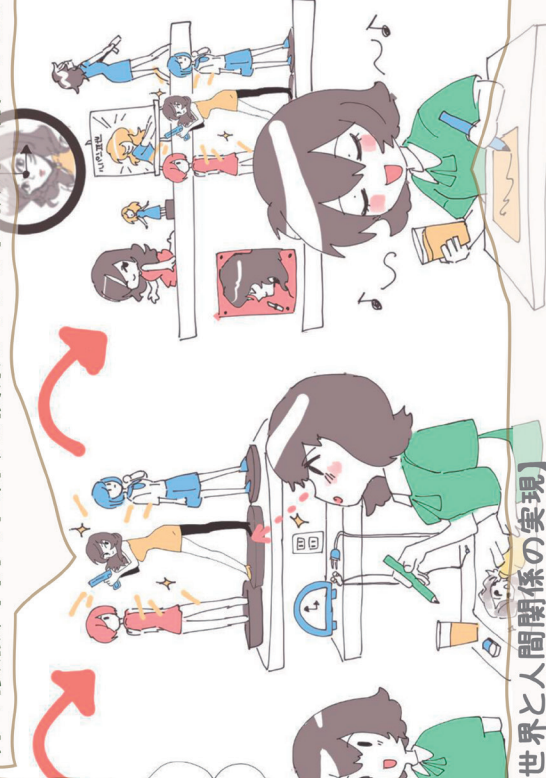
【2. 主体とその欲望】

主体は、ヒロインが登場する漫画・アニメの媒体とそこから浮かび上がるキャラクター触れ、何らかの肯定的な感情(憧れ・相性の良さ・親しみ等、及び対照的な自らの不足感)に苛まれ、一定の欲望が芽生える。

⇒人間界にいる主体の気づき

【4. 欲望とイメージに対するフォロー(⇒陽性転移)】

主体は活性化した欲望のフォローとして、イメージ化/キャラ化した漫画・アニメのヒロインを反復的に、「描く」(二次創作すること、そしてフィギュアを飾って「空間を創る」ことを通して、こうしたイメージ/キャラが、空想ではなく、自らも居合わせるリアルなものであるということを、他のファンとの交流を通して、例えば情報や写真を交換・見せ合ったりして、実感する。主体はキャラとその物語を実体化(視覚化・具現化)すること、あるいは実体化したキャラと触れることによって、人間界と想像界の接点(中間の世界)を模索しながら経験的に築こうとしている。



【5. 新たな世界と人間関係の実現】

種々の反復的な動きかけの結果、主体は、具現化・実体化したヒロインのキャラとの関係を、「家の個室」および「ファン仲間との交流」という自らの生活圏の中に、やや安定的・恒常的に組み込んで、想像界の住人と人間界の住人が対等に関係する、新たな世界と人間関係を実現する(主体性の復活と自然界的な眼差し)。

⇒生命ネットワークの顕現(人間界からの部分的解放と自然界への回帰)

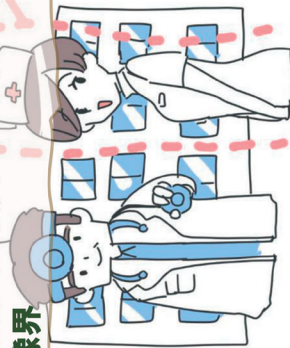
【図・4】ナースのコスプレ

【3. 参照可能なイメージの創造】

主体は自らの欲望に触発または動機付けられ、ナースのキャラクターをさらに自分なりに理想化／美化／タイプ化し、一定の人間的特徴を表すイメージ／記号(⇒**キャラ**)を、ファン間で共有・協同して創り出す。⇒**想像界にアクセスする主体**

【1. 対象】

実世界における看護師という社会的役割・職業・サービスが、メディアやサブカルチャーによって「ナース」として一般化された人格／性格(⇒**キャラクター**)。⇒**想像界**

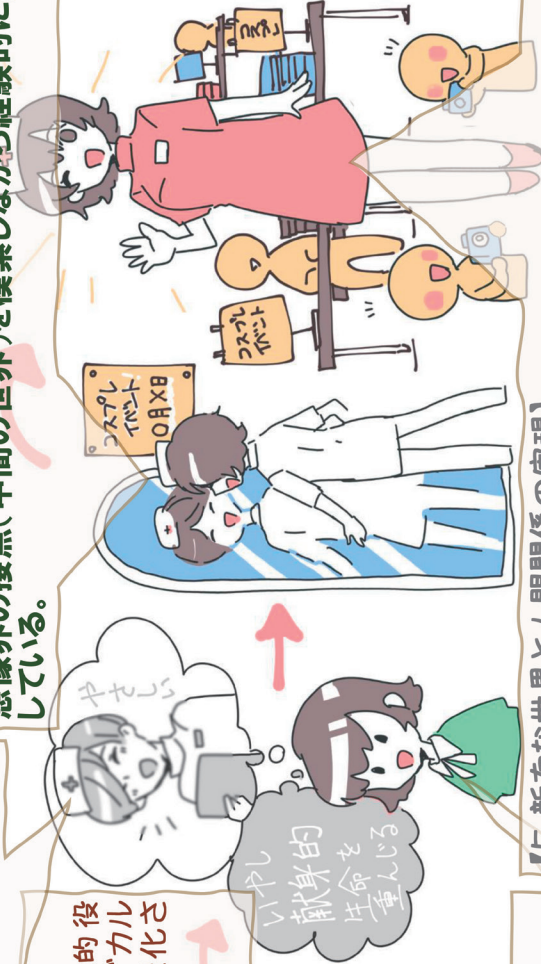


【2. 主体とその欲望】

主体は、「ナース」という一般化されたキャラクターに触れ、何らかの肯定的な感情(憧れ・相性の良さ・親しみ等、及び対照的な自らの不足感)に苛まれ、一定の欲望が芽生える。 ⇒**人間界にいる主体の気づき／目覚め**

【4. 欲望とイメージに対するフォロー(⇒陽性転移)】

主体はコスプレイベントに何度も応募・参加し、ナースのコスプレを積極的・意欲的に着こなし、イメージ化／キャラ化したナースが、空想ではなく自らも居合わせるリアルなものであるということを、他のファンとの交流を通して、たとえば名刺交換したり写真を取り合ったりネット上で話題にしたりして、実感する。主体はナースのキャラを身をもって実体化することによって、**人間界と想像界の接点(中間の世界)を模索しながら経験的に築こうとしている。**



【5. 新たな世界と人間関係の実現】

種々の反復的な働きかけの結果、主体は、具現化・実体化したナースのキャラとの関係を、ファン仲間との交流を含めた自らの生活圏の中に、やや安定的・恒常的に組み込んで、想像界の住人と人間界の住人が対等に関係する、新たな世界と人間関係を実現する(**主体性の復活と自然界的な眼差し**)。 ⇒**生命ネットワークの顕現(人間界からの部分的解放と自然界への回帰)**

【図・5】アイドルの応援

【3. 参照可能なイメージの創造】

主体は自らの欲望に触発または動機付けられ、キャラクター化したアイドルの人格／性格をさらに自分なりに理想化／美化／タイアップ化し、一定の人間的特徴を表すイメージ／記号（⇒**キャラ**）として、同じ志向のファン間で共有・協働して創り出す。

⇒想像界にアクセスする主体

【1. 対象】

実在する人間（シンガー）を中心・主役とする諸媒体（ライブ、コンサート、動画、写真会・握手会等）によって、「アイドル」として一般化された人格／性格（⇒**キャラクター**）。

⇒想像界

【2. 主体とその欲望】

主体は、諸媒体を通してアイドルの実物とそこから浮かび上がるキャラクターに触れ、何らかの肯定的な感情（憧れ・相性の良さ・親しみ等、及び対照的な自らの不足感）に苛まれ、一定の欲望が芽生える。

⇒人間界にいる主体の気づき／目覚め

【4. 欲望とイメージに対するフォロワー（⇒陽性転移）】

主体はアイドルのライブ・コンサート・握手会・選挙等の媒体に積極的・意欲的に何度も参加／アクセスし、そこで、前もってイメージ化／キャラ化したアイドルが、夢でも幻想でもなく、自らもはつきり目撃できるリアルな等身大であり、さらに他のファンとのネット上の交流を通して、たとえば情報や写真を交換・見せ合ったりネット上で話題にしたりして、社会的なりアティティであることを、実感する。主体は他のファンと協同で、アイドルとしてのキャラを舞台上の人物の身に実体化し、そしてその人物を中心とする、みなを結び輪を作り、**人間界と想像界の接点（中間の世界）を模索しながら経験的に築こうとしている。**



【5. 新たな世界と人間関係の実現】

種々の反復的な働きかけの結果、主体は、具現化・実体化したアイドルのキャラとの関係を、ファン仲間との交流を含めた自らの生活圏の中に、やや安定的・恒常的に組み込み、ライブやコンサートという一時的な時空の括りを越えて、想像界の住人と人間界の住人が対等に関係する、新たな世界と人間関係を実現する（**主体性の復活と自然的な眼差し**）。

⇒生命ネットワークの顕現（人間界からの部分的解放と自然界へ回帰）

【欲望】 主体が対象に出会ったときに感じる何らかの欠如（この場合は同主体の人生や全人格にかかわるような大事）と、その欠如の部分の埋め合わせを欲する精神状態のこと。「欲望」のこうした捉え方は、一見してこの語の一般的な意味とほとんど変わらないが、しかし宗教学的な枠組みでは、《主体》と《欲望》と《対象》の3要素間の関係性を、「主体は対象を欲望する」または「対象は主体の欲望を満たす」という関係としてではなく、「主体は対象に要望を植え付けられる」または「対象は主体に欲望をもたらす」という関係として見ている。またこの場合の欲望は、愛しさ・憧れ・親しみ等、人間の文化や価値体系から見た積極的・肯定的なものに限らず、その反対の憎しみ・嫌悪感・敵対心等の消極的・否定的なものも含む。キャラ活における対象「キャラクター」、及びそこから湧いてくるイメージ/記号「キャラ」は、主体が元々抱いている欲望を満たす（欲望に応える）ものではない。この場合の対象とイメージは、主体に欲望をもたらす《原因》であるので、対象に出会う前に、主体がどのような欲望を抱いているのかを知る・感じる・自覚・把握する術はない。

【転移】 主体が、欲望を掻き立てる対象に出会ったときに、何らかのアクションを起



【図・6】キャラ活による自我の着替えと人間界の塗り替え

こしたくなる(起こさずにいられないような)精神状態のこと。ただしこうした欲望は、満たされることはないので、転移とは「欲望に応えようとする」または「欲望する状態を保とう／維持しようとする」反復的な行為や精神状態であると言える。「陽性転移」とは主体が、欲望のきっかけである対象と、「同一化しよう」としたり「近づこう」としたりするかたちで欲望状態を維持しようとする場合のことを言う。「陰性転移」とは主体が、欲望のきっかけである対象と、「距離を置こう」としたり「忌避(タブー視)しよう」としたりするかたちで欲望状態を維持しようとする場合のことを言う。

【生命ネットワーク(新たな生命間の関係)】人間界と想像界にまたがる生命間の関係を意味し、すべての生命体が「人間界的な眼差し」から解放され、「想像界的な眼差し」をお互いに向けて接する関係のことである。この関係は、生身の人間に限らず、擬人化(人間化／生命化)された生命体も含む。

4. おわりに

最後に、カリスマ関係との対比を通して分かった、偶像関係の諸特徴について何点か確認しておこう。

本稿はカリスマと偶像の、フォロワーから見た実体を『**力と存在感のある人間性**』と定義し、いずれも「関係概念」であると見た。偶像の担い手は、①キャラクター、②アイドル、③人形、の3種の形態をとることができるとしたが、これらの形態は、そのままカリスマの担い手にも当てはまる。もっともこの3種の形態は互いに移行することが可能であり、また大抵の場合の担い手は、いくつかの形態を同時に含む混合形態をなしている。

カリスマ関係にしても偶像関係にしても、純粋なカリスマまたは純粋な偶像として現れるのではなく、いずれの性質をもったハイブリッドな力関係として機能するのが常である。またいずれの力関係も、相互に移行することができる。カリスマ寄りの力関係においてよく起こるのは、時間が経つにつれ、偶像寄りの力関係に移行するパターンである。いわゆるマックス・ウェーバーの言うところの「カリスマの日常化」に当たる。一方、偶像寄りの力関係は、担い手の成長と実績、およびフォロワーの欲望の対象を捉えるイメージの変化によって、カリスマ関係に接近する場合がある。偶像関係は、カリスマ関係ほど不安定ではないが、担い手の“聖なる力との媒介性”は、一定しているものではない。強化する場合もあれば弱化する場合もある。

カリスマ関係と対比した場合、偶像関係の特徴の一つは、フォロワーが担い手に人間味を感じる点である。純粋なカリスマの担い手は、あくまでも自然界／聖界に属す

る存在であり、人間界／俗界にいる人間（フォロワー）にとっては、超人間的な別格の存在である。それに対し偶像の担い手は、人間（フォロワー）と同じ人間界／俗界の次元に属するため、フォロワーは親しみをもって模範にしたり模倣したり身近な存在として直接／対等に交流したりすることができる。

ロシア正教のイコンは、山下りんにとって、カリスマの担い手でもなければ（聖なるものそのものではない）、偶像の担い手でもなかった（聖なる力に導く媒介性を有していない）のかもしれない。それが彼女の、ロシア正教の掟を破ってまでも、個性と芸術性を盛り込んだイコンを創作する原動力になったのではないか。この場合の芸術性は、イコンに宿る生命力であり、それは自然界にまで連なる力であると同時に、偶像としてのイコンの媒介性を高めるものでもある。

一方のキャラ活は、担い手がキャラクター・アイドル・人形のいずれの場合でも、フォロワーの出会いのきっかけは、「親しみ」「相性の良さ」「憧れ」であるという点から見ると、最初から偶像関係に近い力関係であることがわかる。キャラ活における偶像の担い手は、一定の神秘性や超自然性をもっていたとしても、フォロワーにとっては、自らの人間界における自我の着替えと活性化をかなえてくれる模範的な存在である。キャラ活に従事する人々は、偶像の担い手を反復的に参照して実体化するという、人間界と想像界にまたがるループの中に身を置いていると見ることができる。

偶像関係は、カリスマ関係と比べ、かなり安定した力関係である。しかし恒常的な力関係にはなりにくい。というのもフォロワーは、偶像を聖なる価値を手にするための媒体／手段としており、聖なる価値そのものは無限なので、フォロワーがある程度の価値を手にしたら、より高い価値とつながることができる別の偶像に乗り換え、軌道を変えながらループを持続させる傾向に置かれているからである。

参考文献

アラム、ジュマリ

- 2014 「キャラクターをめぐる諸活動」における精神構造の基本メカニズム（1）：現代日本サブカルチャーの宗教学考察として」『山口大学哲学研究』21:1-24。
- 2015 「キャラクターをめぐる諸活動」における精神構造の基本メカニズム（2）：『生成儀礼』から見る『キャラクター』『山口大学哲学研究』22:1-29。
- 2019 「『キャラ活（キャラクターを巡る諸活動）』における『擬人化』：『カリスマ』と『偶像』の狭間で」『異文化研究』13:31-56。
- 2020 「キャラクターの二次創作活動（キャラ活）の宗教学的考察：（1）概要編」『山

口大学哲学研究』27:17-46。

2022 「キャラクターを実体化する活動（キャラ活）に見る《転移》:サブカルチャーの精神分析的な解読の試みとして」『山口大学文学会志』72:1-31。

ボードリヤール、ジャン

1979 『消費社会の神話と構造』今村仁司、塚原史訳、紀伊國屋書店。

1982 『象徴交換と死』今村仁司、塚原史訳、筑摩書房。

1984 『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳、法政大学出版局。

Bendix, Reinhard

1960 *Max Weber: An Intellectual Portrait*. University of California Press.

1971 Charismatic Leadership. In *Scholarship and Partisanship: Essays on Max Weber*. Bendix and Roth (eds.), University of California Press.

1986 Reflections on Charismatic Leadership. In *Charisma, History, and Social Structure*. Glassman and Swatos (eds.), Greenwood Press.

Boyer, Pascal

2001 *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought*. Basic Books.

カヴァルノス、コンスタンティン

1999 『正教のイコン』高橋保行訳、教文館。

デュルケーム、エミール

2014 『宗教生活の基本形態（上）：オーストラリアにおけるトーテム体系』山崎亮訳、筑摩書房。

Eco, Umberto

2009 On the Ontology of Fictional Characters: A Semiotic Approach. *Sign Systems Studies* 37(1/2):82-98.

エリアーデ、ミルチャ

1969 『聖と俗：宗教的なものの本質について』風間敏夫訳、法政大学出版局。

1986 『太陽と天空神：宗教学概論Ⅰ』（エリアーデ著作集 第一巻）久米博訳、せりか書房。

2013 『聖なるものをめぐる哲学』平田渡訳、関西大学出版部。

Fenn, Richard K.

2001 *Beyond Idols: The Shape of a Secular Society*. Oxford University Press.

フィンク、ブルース

2012 『精神分析技法の基礎：ラカン派臨床の実際』椿田貴史・他訳、誠信書房。

Forster, Edward M.

- 1927 *Aspects of Novel*. Harcourt, Brace & Company.
- フロイト、ジークムント
- 2007 『夢解釈Ⅰ（フロイト全集 第4巻）』新宮一成訳、岩波書店。
- 2008 『ヒステリー研究（フロイト全集 第2巻）』芝伸太郎訳、岩波書店。
- 2009 『精神分析入門講義（フロイト全集 第15巻）』鷺田清一・他訳、岩波書店。
- 2011 『夢解釈Ⅱ（フロイト全集 第5巻）』新宮一成訳、岩波書店。
- Friedrich, Carl J.
- 1961 Political Leadership and the Problem of the Charismatic Power. *The Journal of Politics* 23(1).
- Geertz, Clifford
- 1983 Centers, Kings, and Charisma: Reflections on the Symbolics of Power. In *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*. Clifford Geertz, pp.121-146, Basic Books.
- Guthrie, Stewart
- 1993 *Faces in the Clouds: A New Theory of Religion*. Oxford University Press.
- 1997 Anthropomorphism: A Definition and a Theory. In *Anthropomorphism, Anecdotes, and Animals*. Robert W. Mitchell, Nicholas S. Thompson, and H. Lyn Miles (eds.), pp.50-58, State University of New York Press.
- 2002 Animal Animism: Evolutionary Roots of Religious Cognition. In *Current Approaches in the Cognitive Science of Religion*. Ilkka Pyysiäinen and Veikko Anttonen (eds.), pp.38-67, Continuum.
- ハルバータル、モツシェ、他
- 2007 『偶像崇拜：その禁止のメカニズム』大平章訳、法政大学出版局。
- Horton, Donald and Richard Wohl
- 1972 Mass Communication and Para-social Interaction: Observations on Intimacy at a Distance. *Psychiatry* 19:215-229.
- 伊藤 剛
- 2014 『テヅカ・イズ・デッド：ひらかれたマンガ表現論へ』講談社。
- クリプキ、ソール
- 1985 『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』八木沢敬、野家啓一訳、産業図書。
- コフマン、ピエール（編）
- 1997 『フロイト&ラカン事典』佐々木孝次訳、弘文堂。

ラカン、ジャック

1972 『エクリ1』 宮本忠雄・他訳、弘文堂。

1998 『フロイト理論と精神分析技法における自我（上・下）』 小出浩之・他訳、岩波書店。

2000 『精神分析の四基本概念』 宮本忠雄・他訳、岩波書店。

ラトゥール、ブルーノ

2011 「〈社会的なもの〉の終焉：アクターネットワーク理論とガブリエル・タルド」
村澤真保呂約『エピステモロジー：－知の未来のために』 Vol 5:228-249。

Lawson, Thomas and Robert McCauley

1990 *Rethinking Religion: Connecting Cognition and Culture*. Cambridge University Press.

リンドホルム、チャールズ

1992 『カリスマ：出会いのエロティシズム』 森下伸也訳、新曜社。

Lints, Richard

2015 *Identity and Idolatry: The Image of God and its inversion*. Inter Varsity Press.

丸山 圭三郎

1981 『ソシユールの思想』 岩波書店。

McCauley, Robert and Thomas Lawson

2002 *Bringing Ritual to Mind: Psychological Foundations of Cultural Forms*. Cambridge University Press.

難波 優輝

2018 「バーチャルYouTuberの三つの身体：パーソン、ペルソナ、キャラクタ」『ユリイカ』 50(9):117-125。

NHK（テレビ番組）

2014 『新日曜美術館 聖像画と生きる：アイコン画家・山下りん巡礼記』。

小田 秀夫

1977 『山下りん』 日動出版部。

1980 『山下りん：信仰と聖像画に捧げた生涯』 筑波書林。

大下 智一

2004 『山下りん：明治を生きたアイコン画家』 北海道新聞社。

Ries, Julien

1995 *Idolatry. The Encyclopedia of Religion*. Mircea Eliade (ed.), pp.72-82, Macmillan.

斎藤 環

- 2011 『キャラクター精神分析：マンガ・文学・日本人』 筑摩書房。
ソシユール、フェルディナン・ド
- 2006 『一般言語学第二回講義』 相原奈津江、秋津伶訳、エディット・パルク。
- 2009 『一般言語学第三回講義（増補改訂版）』 相原奈津江、秋津伶訳、エディット・パルク。
- 2016 『新訳 ソシユール 一般言語学講義』 町田健訳、研究社。

Smith, Murray

- 1995 *Engaging Characters: Fiction, Emotion, and the Cinema*. Oxford University Press.

Sørensen, Jesper

- 2007 *A Cognitive Theory of Magic*. AltaMira Press.

スペルベル、ダン

- 2001 『表象は感染する：文化への自然主義的アプローチ』 菅野盾樹訳、新曜社。

須川 亜紀子

- 2015 「ファンタジーに遊ぶ：パフォーマンスとしてのニ・五次元文化領域とイメージネーション」『ユリイカ』47(5):41-47。

タルド、ガブリエル

- 2007 『模倣の法則』 池田祥英、村澤真保呂訳、河出書房新社。
- 2008 『社会法則／モナド論と社会学』 村澤真保呂、信友建志訳、河出書房新社。

高橋 保行

- 1981 『イコンのこころ』 春秋社。
- 1990 『イコンのあゆみ』 春秋社。
- 1992 『イコンのかたち』 春秋社。

谷口 智子

- 2007 『新世界の悪魔：カトリック・ミッションとアンデス先住民宗教』 大学教育出版。

Thomasson, Amie L.

- 1999 *Fiction and Metaphysics*. Cambridge University Press.
- 2003 Fictional Characters and Literary Practices. *British Journal of Aesthetics* 43(2):138-157.

海猫沢 めろん

- 2018 「ヤンキーが加藤ローサにファンレターを出していたことに絶望したけど安心してください。Vチューバーなら大丈夫です。」『ユリイカ』50(9):53-59。

ウェーバー、マックス

- 1960 『支配の社会学1』 世良晃志郎訳、創文社。
1962 『支配の社会学2』 世良晃志郎訳、創文社。
1970 『支配の諸類型』 世良晃志郎訳、創文社。
1972 「世界宗教の経済倫理 中間考察:宗教的現世拒否の段階と方向に関する理論」
『宗教社会学論選』 大塚久雄、生松敬三訳、みすず書房。
1976 『宗教社会学』 武藤一雄・他訳、創文社。
1987 『社会学の基礎概念』 阿閉吉男訳、恒星社厚生閣。

バイツマン、クルト

- 1984 『イコン大系』 浜田靖子訳、国際文化出版社。

Westh, Peter

- 2014 Anthropomorphism in God Concepts: The Role of Narrative. In *Origins of Religion, Cognition and Culture*. Armin W. Geertz (ed.) , pp.395-411, Routledge.

Whitehouse, Harvey

- 2004 *Modes of Religiosity: A Cognitive Theory of Religious Transmission*. AltaMira Press.

矢内 賢二

- 2015 「隈取のようなもの」『ユリイカ』47(5):34-47。

【付記】

本研究はJSPS科研費（課題番号：20K20683）の助成を受けたものである。